

国立民族学博物館の収蔵品⑫

親族の絆を表す贈り物 — マーマー・チュンルリー —



マーマー・チュンルリーの展示。布の前の赤いサンダルも一緒に贈られ、儀式のときに花嫁が履く。二度と履かなくてよい（再婚しなくてよい）ように、わざと安く壊れやすいものが贈られる。（撮影 筆者）

インドの人びと、特にその八割を占めるヒンドゥー教徒の間では、婚礼は人生最大の儀礼である。花婿・花嫁は王族と同様の敬意を持って扱われながらさまざまな儀式を行い、夫妻となって一人前の社会的人格を持つ者と見なされるようになる。伝統的な婚礼でも数百人の招待客にご馳走を振舞い、晴れ着や贈り物などに多額の金品が使われてきたが、近年の目覚ましい経済発展にともないその盛大さにも拍車がかかっている。披露パーティーにはホテルを貸し切り、豪華な舞台設定

をして歌や踊りを見せたり、花嫁・花婿が華麗なブランド・ファッションの衣装を着て儀式にのぞんだりする光景が中流階層の間でもごく普通に見られるようになってきた。

民族学博物館の南アジア展示場では、インドの婚礼に焦点を当てたセクシオンを新たに設け、中流階層の活力を表す一例として華麗な婚礼衣装も展示している。しかし、今回ご紹介するのは、その脇に展示した何の変哲もなさそうな一枚の赤い布である。この布はインド北部メーワール地方のことばで「マーマー・チュンルリー」（母方おじの肩かけ）と呼ばれ、最も重要な儀式の前に花嫁の母方おじが花嫁の肩にかけることになっている。

ヒンドゥー社会においては、婚礼は花婿・花嫁の個人的な出来事ではなく、家族や親族が新しい社会関係を作るための社会的出来事という考え方が現在も保たれている。縁組みは双方の財力や家格を考えながら慎重に行われるし、関係の永続のため盛大な贈り物の交換が行われる。婚礼はまた、既存の社会関係の確認の絶好の機会でもあるため、それぞれの側の親族内部でも贈与交換が盛大に行われる。しかも、いつ、どういった贈り物を誰が誰に対して行うのかといったことも細かく決まっていることが多い。

インド北部では、おじと甥・姪との関わり方は父方おじと母方おじの間で明確に区別される。父方おじは父と同格で、甥・姪を厳しくしつけ、折り目正しい関係を保つことになっているのに対し、母方おじは優しく気安い関係をもち、甥・姪を生涯にわたって後見する役割が期待される。これは、姪が嫁いでも同じで、姪が婚家で寂しくはじめな思いをしないよう母方おじは折に触れて彼女を物心両面で支えてゆく。筆者が調査を行ってきたメーワール地方では、この絆の象徴としてマーマー・チュンルリーが婚礼のときに贈られるのである。色目は赤と決まっていて、柄もほぼ同じ。他の衣装が競うように高額化するのに対し、この布は比較的安価なままである。だからと言って、他のものが花嫁にこの布を贈ることは絶対にはあり得ないし、別の機会の贈り物の代用にこの布が使われることもない。

具体的な物を通じて抽象的な「関係」を展示するのは案外難しい。だが、この布からはその背後にあって維持される社会関係がにじみ出る。物としてはささやかだが、絆を可視化してくれるこの布は婚礼の展示の欠かせないピースになっている。